

書評 John M. Carrol, Edge of Empires: Chinese Elites and British Colonials in Hong Kong

著者	谷垣 真理子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	48
号	1
ページ	63-67
発行年	2007-01
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00041081

John M. Carrol,

Edge of Empires: Chinese Elites and British Colonialists in Hong Kong.

Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2005, xii + 260pp.

たに がき まり こ
谷 垣 真理子

本書の基本的性格

本書はアヘン戦争時の1841年から1941年の日本軍の香港侵攻まで、100年にわたる英領植民地の形成と発展を描き出そうとする意欲作でもある。著者のJohn M. Carrol氏は米国籍で、幼年時代を家族とともに香港で過ごした。中等教育は香港で受けたが、その学校には彼以外に外国人子女はいなかったという。著者の中国語は香港滞在時中に取得したものである。著者の語学力を反映して、本書は英語資料のみよるものではなく、中国語の資料が、概説書は多いものの、随所で使われている。

冒頭で著者は「衰退する中華帝国と隆盛する大英帝国との政治的・文化的遭遇をとらえることで、香港の逆説性と不適合性 (incongruities) を明らかにする」(p.2) と述べる。本書は英領植民地の形成と発展を、植民地統治に協力した華人に焦点をあてて再構築した。著者のねらいは、統治する側と統治される側との二元論的な世界ではない香港史を構築することにある。イギリス統治がすぐれていたから植民地が形成されたのではなく、植民地という空間に積極的に参加する華人がいてはじめて植民地・香港は形成された、というのが著者の香港像である。

「植民地統治への協力者」という視点は、必ずしも先行研究の比較検討のみから生まれたものではなく、著者の香港での鮮烈な経験に由来する。

第1はデモへの参加を誘った際の親友の反応であ

る。1973年、イギリス系警視・ゴッドバー (Godber) の私財が450万香港ドルにのぼることが発覚し、司法長官は釈明を求めた。しかし、このときすでにゴッドバー本人はイギリスに逃亡していた。著者が親友を誘ったデモは「汚職反対、ゴッドバー逮捕」を要求するデモであったと思われる。親友はまったく興味がないといい放ち、「植民地香港の状態がいかによい状態にあるか理解すべきだ。大陸の親戚は米と白菜の配給で生きている」と語ったという。

第2にエリベス2世の香港訪問時の経験である。当時、著者の高校の歴史教師は中国系の女性であったが、女王訪問についてスクラップ帳をつくるよう課題を出したという。中国系の同級生は皆熱狂した。著者は宿題に興味を感じず、物議をかもし出すような自主課題を作成し、教師から受け取りを拒否されたという。

この2つのエピソードは著者に「植民地統治に協力する中国人がいて、はじめて香港は形成された」とつよく意識させる契機になったと推測される。

さらに、著者は、先行研究における二元論の世界が気になったようである。著者によれば、これは、第1に返還後の香港研究の偏向性に起因する。返還後、香港における香港研究は、返還後の現状分析的なものか、もしくは香港史のなかに強いて中国的なものを見出そうとする傾向が つよまった。第2に先行研究間の断絶性である。著者は先行研究を中国的な香港研究とイギリス的な香港研究に分けて整理した。香港研究は中国の学者にとっても、イギリスの学者にとっても周縁的な学問の対象であった。中国の学者は中国プロパーの対象を研究し、イギリスの植民地主義を研究する学者はアフリカかインドの事例に関心を寄せた。数少ない香港研究のうち、イギリスの香港研究はイギリス人総督や香港政府公務員に焦点をあてて、香港の華人は香港史のなかで記述されてこなかった。一方、中国の学者はマルクス主義的歴史観から、香港を西洋列強の中国侵略拠点としてのみとらえ、香港の華人社会そのものにはまったく学問的関心を払わなかった。過去15年の間によく研究に多様性が見られ、華人社会の研究も進展した、と著者は整理する。

本書の構成と要約

本書の構成は以下のとおりである。

序 論

第1章 植民地主義と協力 臣下たる華人と英領香港の形成

第2章 より良き階層の華人 「東洋の百貨店」の建設

第3章 戦略的なバランス 植民地的文脈における地位と尊敬

第4章 彼ら自身の場所 クラブと団体

第5章 ナショナリズムとアイデンティティ 何啓の事例

第6章 香港を維持すること 1925～26年のストライキ

第7章 「岩だらけの小さな島」を変身させること 1941年の香港割譲100年祭

結 論

第1章は、本書のなかではもっとも完成度の高い章であろう。「通説」では誕生当時の香港島は5,6000人程度の人口が居住するぐらいであり、英領植民地・香港を形成したのはその後流入した単身の若年男性人口であったと表現される。本章では実際にどのような人々が香港を形成したかをSmith(1985)の研究を踏まえて説明していく。

そもそも、イギリスははるかヨーロッパに位置していたので、「岩だらけの小さな島」に文字通り植民地都市を築くためには、物資を運び込み、建物を建設する存在が必要であった。これらの行為を著者は「植民地主義への協力」と位置づける。「協力」の歴史は、アヘン戦争時より始る。英軍に物資を供給したのは、華南の水の上居民「蛋家」であった。盧亜貴(Loo Aqoi)は香港黄埔の貧しい蛋家の出身であったが、英軍への物資補給で財を成し、アヘン戦争後は香港でも有数の商人となった。同様に広東省開平出身の譚亜才(Tam Achoy)がシンガポールのドッグヤードで働いた経験を活かし、建築業で頭角を現した。さらにアヘン戦争後、「買弁」

(comprador)が外国人商人のもとで中国大陸の華人商人との交渉にあたった。ただし、こうした人々は中国社会の周縁的な存在であった。蛋家は広東人から差別を受け、海外居住者は、鎖国政策を採る清朝にとっては「国家への反逆者」と見なされた。

第2章ではまず「香港にはまっとうな華人がいない」というヨーロッパ人の香港観が先行研究やさまざまな資料を通じて紹介される。香港政庁は香港の発展に満足していたわけではなかった。「自由港」であったものの、香港の貿易額は期待されたほどには伸びなかった。華人商人のジャンクは、1842年の南京条約で開港された五港から、清朝からの許可書を携帯した場合のみ香港に入港できた。仮に入港したとしても、香港での売買は五港での売買よりも割高であり、広東当局は香港入港に制限をかけた。しかも「周縁的な存在」が主流の香港社会は治安が決してよくはなかった。

しかし、1850年以降、香港社会の様相は一変する。北米で金鉱が発見されると、海外への移民熱が起き、条約港として香港の重要性が高まった。同時に太平天国の乱で中国大陸が混乱したことも、香港への人口流入を生み、富裕な商人層が香港に居住するようになった。その好例が広東省新会出身の李陞(Li Sing)であった。李は香港で錢莊(為替業務を中心とする金融商)を開業し、その後香港ではじめて保険会社を設立した。このころになると、香港への外国投資は急増し、香港の将来も楽観視された。

第3章では香港に誕生した華人商人という集団が植民地という空間をどのように利用したのかが描かれる。1860年前後の香港政庁には中国語を習得していたイギリス人官僚はおらず、その意欲もみられなかった。「統治する者」と「統治される者」との断絶は大きかった。統治する側が無関心であったがゆえに、統治される側は自身で社会秩序を構築していった。その一例が東華三院(1872年)や団防局(District Watch Force, 1866年)であり、香港政庁が提供しえなかった衛生の改善や治安の維持に取り組んだ。東華三院は当時の香港在住の華人が西洋医学を敬遠したため、中国医学による医療を提供した。その後、華人社会全体の意見を政府に伝達する機能を発揮す

るようになった。

こうした組織のリーダーとなった華人商人は、政府と華人社会との断絶関係のなかで、中英双方の帝国を利用して自身の地位の強化を図った。香港の華人商人は中国大陸で飢饉が発生した際には義捐金を送る一方、清朝から官位を売買によって取得し、中華帝国秩序のなかでの自身の正統性を西洋人社会に対して主張した。逆に、英国王室の香港訪問の際、華人商人は積極的な歓迎活動をし、英文による名人録に掲載されることで自身が成功した存在であることを香港の華人社会に対してアピールした。こうした「橋梁」としての地位を果たすために不可欠であったのが英語教育であり、1862年には大書館（Central School）が設立された。

第4章では台頭してきた華人商人の香港での社会生活に目を転じる。香港では植民地という枠組みで一方的に華人を弾圧することはなく、華人商人が台頭する空間を許容した。しかし、それは、華人商人に対する人種の偏見がなかったことを意味しない。ヨーロッパ人社会は子女の教育のため、華人を排除した学校の設立を請願した。ビクトリア・ピークには華人の居住が許可されなかった。ヨーロッパ人の社交場となった各種クラブには華人は入会できなかった。欧亜混血者もまた華人としてヨーロッパ人の社会から排除された。

ただし、こうした華人への排除は、ヨーロッパ人社会が華人商人の経済力におされてきたことのあらわれでもあった。富裕な華人を排除することで、比較的貧しいヨーロッパ人の動揺を緩和しようとした。こうした状況に対して、華人商人はヨーロッパ人の仲間入りをしようとするのではなく、独自の世界を構築することで対抗した。華人商人はヨーロッパ人とほぼ類似したクラブを設立し、そこではヨーロッパ人を排除した。こうして欧亜混血者を含む華人商人はヨーロッパ人と同様に、近代的で尊敬に値する紳士であることを誇示し、一般の華人とは異なる一群であると自己認識した。

第5章では19世紀後半に台頭してきた華人エリートが、20世紀という時代にどのように対処したのかを問いかける。本書のなかでは第1章と並んで完成

度の高い章である。本章でとりあげられるのは何啓（Sir Kai Ho Kai）である。この時期になると、香港の華人社会のリーダーは香港で生まれ育ち、イギリスで教育を受けた者が多くなる。何啓も1871年に香港で生まれ、12歳の時にイギリスに留学し、医学士と法廷弁護士の資格を取得し、90年に香港政府から立法評議会（国会に相当）議員に任命された。香港大学の前身にあたる医学院を設立し、孫文はその学生であった。

何が直面したのは、日清戦争による敗北以来、帝国主義勢力が勢力を浸透させていく中国であった。孫文の革命運動を支持しながら香港政府で議員をつとめたことから、何は「イギリス植民地主義に協力した愛国者」（Collaborationist Patriot）と評される。著者は、何は中国が香港かの二元論ではなく、「香港にとってよいことは中国にとってもよいことである」という発想であったと指摘する。商業を振興することが富強への道であるという考えは、香港の実状をつよく反映したものであった。

何は香港での華人墓地の設立、保良局の地位保全など華人の利益を代弁することに成功したが、電車ストライキ（1912～13年）では二者択一を迫られた。従来の主張を貫いた何をメイ（May）総督は要請に十分にこたえたものではないと判断した。ストライキ終了後、メイは何を立法会評議員に再任せず、何は香港での政治的キャリアを終えた。

第6章では、香港華人エリートが中国のナショナリズムにどのように対処したのかを別の事例からさぐる。本章でとりあげられたのは、1925年から26年にかけての広州・香港ストライキである。これまで中国の労働運動として記録されてきたストライキを、本章では香港華人エリートが植民地統治を継続させるためにどのようにストライキに関わったのかを描く。

本章で登場する華人エリートは周寿臣（Chow Shou-sun）と羅旭和（Robert Kotewall）である。周は容闈の発案で始まったアメリカへの派遣留学生の第3期生であった。唐紹儀とともにコロンビア大学に学び、帰国後袁世凱の幕僚を務めた。羅旭和は欧亜混血者であった。

ストライキは外国人の特権的な待遇の是正をはじめとして、労働者の8時間労働の実現、立法評議会議員の選挙による選出、ビクトリア・ピークへの華人居住の容認など、植民地統治に挑戦する内容であった。華人エリートにとっては、ストライキは香港の存在の根幹に関わるイデオロギー的経済的脅威であった。周と羅は工商日報を発足させ、海外華人に向けてストライキがポリシェピキ勢力に操作され、社会の安定を損なうものであると主張した。ストライキ側に疲れがみえ始めた時期、両者はマカオで国民党の代表と香港政府を代表する立場で会談した。前章で何啓が忠誠心を疑われたのとは対照的に、両者の忠誠心への疑念は起きず、ストライキ後両者は行政評議会（内閣に相当）議員に推挙された。

第7章は植民地発足100周年の記念出版物をとりあげる。本書は著者の博士論文に加筆したものであるが、本章ははじめからの書下ろしとなる。100周年記念出版物は当初1941年に出版するよう準備された。しかし香港が日本軍政下に置かれた（1941～45年）ため、軍政期の状況を含めて再編集され48年に出版された。著者は、この書物を通じて香港華人エリートが植民地の歴史を語ることで、自身の香港史における役割をどのように語っているのか分析しようとする。華人エリートは中国大陸の動向と比較することで、自らの独自性を評価する。しかし同時に自身の存在を周縁化させる方向性をもった香港の植民地主義に対抗しようとする。

本書の成果と問題点

評者は本書について次の3点を評価したい。第1に本書が1841年から1941年までの香港をひとつのテーマで描ききった点である。構成の意図は明確である。最初の2章で香港華人エリート社会の形成を述べ、次の2章で植民地の空間のなかでの華人エリートの社会的活動を説明した。そのうえで残る3章では彼らのアイデンティティのあり方や香港政府への忠誠心が問われた印象的な事例を比較し、香港という空間を華人エリートがどのように利用したのかを描いている。

第2に英語の資料に依拠した香港研究の可能性を示した点である。著者は評者へのメールで「香港研究は香港のローカルな人々以外によって行われることで、より一層洗練されたものになる」と語った。香港が中国に返還された現在、外部観察者にとって香港の中国度は無意識のうちに高まっている。本書はテーマの設定次第では、英語の資料を中心にしてもそれほど欠落観のない香港像を描き出すことができることを提示しえた。中国語資料の不十分さは否めないが、本書は、それを補うテーマと手法があることを示し、中国語資料のみへの依拠では描き出せない香港の一側面を描き出すことに成功している。

第3にその過程で1841年から1941年にかけての香港を扱った英語の参考文献を綿密にカバーしている点である。本書はこの時代の香港を調べようとするとき、何から読めばよいかを丁寧に教えてくれる。本書は研究書であると同時に、香港研究を志す人々にとってよき読書ガイドとなっている。また、論理が一貫している著作だけに植民地主義に関するアメリカの学界における議論を考える際の参考を提起してくれている。

しかし、以下の点は本書への不満点として挙げざるをえない。まず、第1に本書では著者のオリジナリティーが必ずしも明示的に表現されていない点である。本書は詳細な注をつけているが、何が先行研究かを紹介しているにとどまり、著者の論はそれらとどのように違うのか、必ずしも明示的に示していない。記述のスタイルの違いであるとは思いますが、先行研究にどのように依拠しているのか、そこで展開されている概念への批判の有無などを、説明した方が読者には親切であろう。たとえば、注での引用や当該書の内容を考えれば、第1章は明らかにSmith（1985）の学問的恩恵を受けている。初期の香港社会における華人エリートの事例として挙げられているものは、Smithの著作ですでに紹介されている。蔡榮芳には「植民地政府に協力的な華人エリート」という概念を実証的に記述した研究がある。第6章のストライキに関しては陳明録のさまざまな著作がある。

第2に膨大な先行研究を紹介しているにもかかわ

らず、根本的な点で本書は参照すべき著作を先行研究としてとりあげていない。植民地主義を議論するのであれば、やはりFaure (2003) をとりあげてほしかった。Faureは香港人の植民地主義的心情を次のようなエピソードから語ろうとする。グランサム (Alexander Grantham) 総督が石硤尾大火災の後、街坊のリーダーと会見した。リーダーはすその長いマンダリンコートを着用していた。「英語が話せますか」という総督の質問にリーダーは「少しだけできます」と答え、「わたしはコロンビア大学を卒業しました」と答えたという。Faureはイギリス人という相手に対して相手の望む自身の中国人性を演出してみせる態度を植民地主義的であると指摘する。全体的にイギリスの研究としてとりあげられているものは香港研究の古典的なものが多い。しかし、香港の研究者のなかにはイギリスで学位をとった者が少なくなく、イギリスで教鞭をとる者もいる。Faureはその代表例であろう。彼は香港大学を卒業し、アメリカで学位を取得し、香港中文大学で教鞭をとった後、イギリスのオックスフォード大学に移籍した。著者はFaureをはじめとするイギリスで発信された、最近の良質な研究をもう少し視野にいれるべきであろう。

第3に、第1点とも関連するが、香港社会を二元論的記述ではなく描くことを主眼としていながら、記述が多元論的には展開されておらず単線的に感じられることがある。まず、これまでどのように偏った香港像が語られていたのか、各章での具体的な説明がないことが影響しているように思われる。また本書のなかでたびたび登場する何啓東 (何東) や何啓、周寿臣、羅旭和について生没年の記述や経歴の紹介は不十分である。論理的整合性がつよすぎるあまり、結論のみが記述されている箇所がある。たとえば、第4章で華人商人が設立したクラブがイギリス的なものでもなく、中国的なものでもなく、香港

的としか形容できないものであると結論づけている。そのためには、どのような点が香港的なのか説明する必要があるが、残念ながら本書では説明がなされていない。何啓、周寿臣、羅旭和は立法評議会議員時の発言を資料として使っているが、本書では発言の背景についてそれほど紙幅を費やしてはいない。

最後に、本書には香港の人名や地名などに関する用語集は付されていない。予算の制約の関係であろうが、漢字圏の読者にとっては少々残念である。

とはいうものの、著者の博士論文に加筆したものであることを考えれば、本書は著者の研究の一通過点である。著者は2006年10月より香港大学文学部歴史学科で教鞭をとっている。香港社会に身を置きその複雑さを体感する環境のなかで、著者が香港でどのように研究を進展させていくのか、次回作が心待ちである。

文献リスト

< 英語文献 >

- Chan, Ming K. ed. 1994. *Precarious Balance: Hong Kong between China and Britain, 1842-1992*. Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Faure, David 2003. *Colonialism and the Hong Kong Mentality*. Hong Kong: Centre of Asian Studies, University of Hong Kong.
- Smith, Carl T. 1985. *Chinese Christians: Élites, Middlemen, and the Church in Hong Kong*. Hong Kong: Oxford University Press.

< 中国語文献 >

- 蔡榮芳 2001. 『香港人之香港史 1841 - 1945』 Hong Kong: Oxford University Press.

(東京大学大学院総合文化研究科助教授)